

西光寺だより

第二五九号 令和五年十一月一日発行

■今月のカレンダー■

生の依りどころを与え 死の帰するところを
与えていくのが 南無阿弥陀仏

本来宗教とは、私たちに正しい生き方を指し示し、正しい死の受容を明らかにするよう促すものだと思います。

ところが、現代社会において、宗教は自分の欲望を満足させるための祈りであったり、自身の不安や困った状況を自分以外の何かに責任転嫁して、それらを排除していこうとするための手段となっているように思われます。

また仏教も、生き方を問うことよりも死後に重きがおかれ、教えの内容よりも儀式や勤行などの形に偏った、本来とは少しちがう伝承になつているように感じます。それは当然、伝える側の責任が大きいこととは言うまでもありません。今こそ仏教、とりわけ浄土真宗が何を伝えて来たのかを確認する必要があります。

ご門主は、伝統奉告法要初日のご親教で、親鸞聖人がご門弟に宛てられたお手紙を現代語で紹介され、私たちの生き方について、

「(あなた方)今、すべての人々を救おうという阿弥陀如来の本願のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり・いかり・おろかさという三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の薬をつねに好む身となつておられるのです」とお示しになられています。たいへん重いご教示です。

こんにち、世界にはテロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積しています。これらの原因の根本は、ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩惱にあります。

もちろん、私たちはこの命を終える瞬間まで、我欲にとらわれた煩惱具足の愚かな存在であり、仏さまのようなとらわれない完全に清らかな行いではありません。しかし、それでも仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心になう生き方を目指し、精一杯努力させていただく人間になるのです。

と、仏法を依りどころとして生きる大切さを述べられました。

私たちは、阿弥陀さまの「すべての生きとし生けるものを救う」というご本願のお心にふれることによって、むさぼり、いかり、おろかさという煩惱に振り回され、自分や自分に縁のある人の幸福や利益のことしか考えられず、自己中心の生き方しかしてこなかった、恥ずかしい自分であることに気がつくのです。

そこから、少しずつ自分中心から仏さまの教えを中心に生きようとする私に変えられていきます。阿弥陀さまの「すべての生きとし生けるものを救う」という願いは、私の生きる依りどころとなるのです。「すべての生きとし生けるものを救う」というお心は、言い換えれば『四海のうちみな兄弟』(曇鸞大師)ということなのです。

そこには、敵味方という対立もなければ、怨み憎むというようなことも、自分の気に入らない人々を差別し排除することもありません。すべてはみな、等しく尊いもの、阿弥陀さまの浄土へと迎え取られていくいのちとして、死の帰するところが与えられます。

阿弥陀さまのお心を生きる依りどころとして、本当の人となり、そして、やがていのち終える時には、お浄土へ往生し仏とならせていた

だく道があります。その道を阿弥陀さまは伝えようとなさったのです。
(法語カレンダー 解説書より)

◆十一・十二・一月の行事◆

・十二月 二十三日 (木・祝)

報恩講法要

・午後二時 (お勤めと法話)

・午後七時 (前々住職三三回忌追弔会)

午後七時半 (お勤め)

西光寺本堂

・十二月 三十一日 (日)

除夜の鐘

午後十一時五〇分

西光寺鐘楼

・一月 一日 (月)

元旦会法要

午前十時

西光寺本堂

◆先月の報告◆

①十月三日 (火) 西光寺本堂にて、午後二時のみの秋季永代経法要を厳修致しました。そして、恩徳讃を味わいながら、お釈迦さまの尊いご法話を頂戴いたしました。皆さんありがとうございました



②十月二十一日 (土) 西光寺本堂にて細川家初参式を行いました。新しいのちの誕生を阿弥陀さまにご報告いたしました。ようこそそのお参りでありました。おめでとうございます。

